

日本経済新聞

がんとアルツハイマー、世界的な「怖い病」の相違点は



内閣府が2023年に実施した「がん対策に関する世論調査」によると、9割以上ががんについて「怖い印象を持っている」と回答しています。米国や欧州での調査でも、少なくとも半数以上の人が「他のどの病気よりもがんが怖い」と答えています。

55～64歳の英国人を対象とした調査の結果をみると、がんを一番恐れている人が6割近くを占めました。特に女性や教育水準が低い人、全般的な不安感が強い人でがんへの恐怖が有意に強い結果となりました。

人々ががん並みに恐れている病気が認知症、とりわけアルツハイマー病です。アルツハイマー病は脳に異常なタンパク質がたまり、神経細胞が死んでいくことで記憶や判断力が徐々に低下する進行性の病気で、認知症の約6～7割を占めます。

認知機能が低下するだけでなく、がんと同じく寿命が短くなります。過去の研究によると、アルツハイマー病と診断された人の平均余命は7～10年程度とされています。

私の父もこの病気により82歳で亡くなりました。アルツハイマー病もまた、がんと同じく遺伝の関与は大きくはないですが、私自身も気になる病です。

世界的に見ても、がんとアルツハイマー病が怖い病気の2強といえます。50歳以上のノルウェー人に対し、様々な病気に対する恐怖を0（恐怖がない）から10（最も恐ろしい）で尋ねた調査があります。平均値は1位ががん（7.32）、2位がアルツハイマー病（7.25）でした。10と回答した人の39%がアルツハイマーを、30%ががんを挙げました。心臓病や糖尿病、エイズの回答はいずれも約2%にとどまり、がんとアルツハイマー病への恐怖が突出していました。

若い世代はがんを、高齢者ではアルツハイマー病をより恐れる傾向があるようです。がんには「死の病」のイメージがあり、より死を恐れるとされる若年層に怖さを感じさせるのでしょう。高齢者に多いアルツハイマー病は自己喪失の恐怖をもたらします。がんとは異なり完治不能な上、家族への負担が大きいことも恐怖の理由でしょう。

41年間がん治療の現場にいますが、アルツハイマー病のがん患者を診たことは実はほとんどありません。私の専門である放射線治療では、位置の精度がミリ単位で求められるため、患者には数分から数十分間じっと静止してもらいます。認知症患者には困難ですが、実際に困った経験はほぼ皆無です。

アルツハイマー病の患者にがんが少ないことも明らかになっています。次回もがんとアルツハイマー病を考えます。

2026年5月20日